

社友会だより

第 19 号

発行 センツウ社友会
 住所 東京都港区赤坂 2-4-5
 〒107-0052 (国際赤坂ビル 3F)
 ドコモ・センツウ株式会社内
 編集者 大場省平

＊ 役員会の開催 ＊

- 日 時 平成 20 年 10 月 28 日 (火) 13:00～16:00
- 場 所 島嶼会館 (港区海岸) 会議室
- 議事等

報告 (事務局長)

1. 会員の状況
 - ・会員数 200 名
2. アンケート結果の発送 (手違いのため前号で発送出来なかったため今回発送)

議題

1. 会社解散に伴う社友会の運営
 - ・事務所 現行の「会社内」に置く、を「事務局長宅」に変更、と併せて「郵便振替」の手続きを行う。
 - ・他社に移籍する社員等の把握 (入会勧誘) は、事務局長を中心に会社人事主幹部と折衝、現地支店長に依頼できる体制に。
 - ・会費に種別を設けたらとの意見があったが、更に検討。
 - ・年会費 ウェイトの高い法人会費がなくなること勘案すれば、財務はますます厳しくなり、今期目標の事業の拡大どころか来期の経営も危なくなる。“値上げやむなし”で出席全役員が認識。
 - ・組織 各地域に社友会を設立し、これの連合組織にしたらどうか、との提案があったが、議論を深めるため、引き続き検討。
 - ・社友会の名称 「日本船舶通信」のイメージが滲む名称が望ましいとの提案があったが従来から「船通 (センツウ)」さんとお客さんに親しまれて来ており、現社名「センツウ」とも重なるのでこの儘でよいのでは？
 (本日の論旨は、各地域役員にも語り、さらに議論を深める)
2. その他 会報編集の現況 他。

＊ 社友会懇親会開催 ＊

平成 20 年 9 月 26 日 (土) 午後 3 時から、東京駅北口にある「やるき茶屋」にて東京近郊在住者による恒例の懇親会が開催されました。



今年は、例年になく暑さが続き、都心へ来られる方が少ないのではと思っていましたが、当日は若干肌寒く感じられ、懇親会日和りとなりました。

総勢 19 名が揃ったところで清水幹事の挨拶、続いて遠方から駆けつけて下さった今井さんの乾杯の音頭により開宴となりました。



久しぶりでの懇親会であったことから、話はずみ予定時間が過ぎても話が尽きず、時間の延長と飲み物



の追加等で幹事さん、店側の交渉等御苦労さまでした。最後に宮崎さんの中締めによりめでたく閉宴となりました。

今回の開催まで、お元気で過ごして下さい。

[レポート黒田繁雄さん]

＊ 20 年度ゴルフコンペ開催 ＊ 山形剛士さん優勝

平成 20 年 9 月 8 日 (月) クリアビュー CC において恒例のゴルフコンペが開催されました。

天候は晴れ、厳しい残暑ながら絶好のゴルフ日和でした。しかし、8 月末関東地方を襲った集中豪雨によるコースの冠水 (3 日間クローズ) で、一時は中止か？と心配しましたが、無事に開催することができました。ただ、グリーン (コーライ芝) の芽がきつく、パットには皆さん苦戦されました。なお、今回はロングホール (4) とショートホール (4) の計 8 ホールにドラコンとニヤピンを設定しました。参加された方々と入賞された方は次のとおりです。

○「参加者氏名 (スタート順・敬称略)」

- 1 組 法安忠美・目黒 敏・沖本良平
- 2 組 檜尾政司・鈴木 徹・加藤恒男・黒田繁雄
- 3 組 福田嘉信・立石孝男・大村唱一・山形剛士
- 4 組 安部正一・林 憲男・足助 正

○入賞された方 (敬称略)

順位	氏 名	グロス	ハンディ	ネット	その他
優勝	山形剛士	92	17	75	BG/DC
2 位	沖本良平	93	14	79	NP×2
3 位	立石孝男	99	18	81	NP

○入賞された山形剛士さんの喜びの声

平均年齢 70 歳をはるかに超える中で、若手？の私が優勝できました。私の正確な性格のなせる技か、好不調の波が大きく、良ければ 80 台も偶に出ますが、100 をはるかに超える事もしばしば、優勝争いをしたりブービー争いをしたり、全く同じ人間とは我ながら

思えません。

今回は上手な方がプレーしたのでしょう。

社友会コンペは、過去何回か優勝はありますが、今回念願のベスグロが取れた事を何より嬉しく思っています。

事務局よりひとこと

円滑なコンペの運営にご協力頂きありがとうございました。

秋季大会の時期を天候安定する 10 月に変更したらどうか、との提案があり、皆さんも賛成されましたので、10 月の第 2 月曜日（祝日の場合は第 3 月曜日に変更します。また、年に 3 回開催したらどうか、との提案もありましたが、諸般の事情でコンペとしての開催は現状どおり年 2 回（春・秋）とします。私的なゴルフ会は随時実施しますので、ご協力をお願いします。本日はお疲れさまでした。 レポート[沖本良平さん]

＊ 金沢雑記「空から謡が降る」まち ＊

[戸田眞一郎さん]

金沢等では他の地域から移り住んできたひとをよく「旅のひと」などと言います。この地に何十年と住



んでいても移ってきたひとは、そのような見かたでいつまでもみられるようで、特に年配の方々にはその傾向が色濃く残っているまちです。私がそんな地に赴き

早いものでもう 11 年が経過しました。

皆さんは「かなざわ」と聞いて何を思い起こされるでしょうか。甘エビ・ズワイガニ・寒ぶり等の新鮮な魚介類や加賀野菜等の生鮮食料品がならぶ金沢の台所近江町市場、雪つりやことじ灯籠等で名高い名勝「兼六園」、現存している建物遺構石川門や目を見張るよう



〈JR 金沢駅東口ともてなしドーム〉

な石垣群に加え、五十間長屋・菱櫓・橋爪門統櫓等が復元され、加賀百万石の威容が再現された金沢城、碑林の多いことでは日本一？の卯辰山、三味線・鼓・太鼓・笛の音が聞こえる花街三茶屋街（ひがし、にし、主計町）と加賀料理に舌鼓を鳴らした老舗料亭旅館、加賀友禅・金箔・漆器・陶芸・加賀織等の伝統工芸、昔ながらのまち並みを保存している長町武家屋敷群と用水の流れやひがし茶屋街の風情、能・踊り・華道・茶道・芸術等の伝統工芸や芸術文化の承継等々・・・あなたはどの金沢をイメージしますか。

「加賀の国」は百姓が治める国といわれ続け、その拠



〈金沢城三の丸・五十間長屋〉

点のひとつが金沢城の前身、金沢御堂（御山）でありました。その金沢は 1583 年（天正 11 年）前田利家が入城してから、城構えや町並みは大きく変貌しつつも、落雷等による火災によりお城を含めその様相は幾多の変遷を経て、今日の都市金沢を築き上げてまいりました。

城下町金沢は、大政奉還・廃藩置県・文明開化・殖産興業（繊維・鉱山）・近代教育の普及（第四高等中学

のちの第四高等学校等の教育機関の設置）・鉄道敷設（北陸線小松・金沢間）・名古屋鎮台分営と第九師団司令部の設置・大規模な道路の建設・街鉄敷設（市内電車）・商業施設の充実等々の近代化、商業都市化の歴史を経て、その都度、時代の要請に合わせて大きく変貌を遂げてきました。

私が移り住んでからも、金沢駅前と武蔵ヶ辻とを結ぶ道路（本町—安江町間 500m）が一直線に結ばれ開通、石川県庁が広坂から鞍月に移転、金沢東部環状道路（今町—四十万町 20km）の開通、金沢城内の五十間長屋・菱櫓・橋爪門統櫓等の復元、金沢駅前の「もてなしドーム・鼓門」の建設、いしかわ動物園の移転（卯辰山から辰口丘陵）、21 世紀美術館、県立音楽堂及び能楽堂、映画館付大型商業施設、マンション等集合住宅の建設ラッシュ、ホテルの建設ラッシュ等々、町並みは大きく変化しており進化するまちとなっております。特にここ数年建設用クレーンが目につくようになりました。



〈ひがし茶屋〉

金沢ではいま「昭和の住所表示改正」に伴って消えていった懐かしの町名を復活させようという機運が高まり、平成 11 年に全国で初めて「主計町」が町名復活したのを皮切りに「飛梅町」「下石引」「木倉町」「柿木島町」「六枚町」「並木町」「袋町」とすこしずつ復活して、今年 11 月には今ではビジネス街の「南町」が町名復活する予定になっています。平成 16 年に金沢で開催された「町名復活フォーラム」、である著名人はこれらの運動を「町名復活一揆」と称して絶賛されたようです。

私が住んでいる所は尾張町といい、以前は「殿町」といわれたところ。地域活動の町会名は「上殿町」といい、「殿町」が 2 ブロックに分かれていたのでひとつを「上殿町」もうひとつを「下殿町」と名付たようです。

金沢での町会活動の地域地区名は、旧町名や校下名

(小学校名)の名前で活動しているところが殆んどであると思います。が、故に普段から旧町名に愛情があるのではないかと。いまは、町会にも顔お出し町内の皆さんと一緒に活動をしたり、昨今流行のご当地検定「金沢検定」にチャレンジしており、休みの日になると近所をブラブラと探訪し歩いております。いま特に気をつけていることは健康です。9年前に心臓を患ってから何回か入院を繰り返したことから、「血液のマッサージ」と称して、いつもペットボトルを片手にお城回りや町中をあっちキョロキョロ、こっちキョロキョロと歩き回っております。

仕事は今年の3月に定年を迎えた後も嘱託として引き続きエンジ北陸で老若男女に囲まれながら働かせてもらい、妻と共に元気に過ごしております。

ところで皆さんは、石川県がかつてほんの僅かな時期ではありますが、「金沢県」と定められたことがあったのをご存じでしょうか。という私も金沢に移り住むまで知りませんでした。前田家(本家・分家)は加賀藩・大聖寺藩・富山藩を長きに亘り治めてきましたが、大政奉還後明治4年7月の廃藩置県により、これら各藩は「金沢県」(旧郡表記：能登4郡大部分・石川郡・能美郡大部分・河北郡・砺波郡・射水郡・新川郡大部分)、「大聖寺県」(江沼郡・能美郡一部)、「富山県」(婦負郡・新川郡一部)と移行しました。が、翌明治5年2月には県域も大幅に変更され「石川県」(改名)(石川郡・能美郡大部分・河北郡)、「七尾県」(金沢県分割)(能登4郡・射水郡)、「新川県」(金沢県分割と富山県併合)(砺波郡・婦負郡・新川郡)という具合に更に変わってしまいました。その後も明治9年4月、9年8月、14年2月、16年5月と県域の変更が行われましたが、再び「金沢県」と呼称に戻ることは残念ながらありませんでした。8ヵ月間だけの「金沢県」でありました。

現在定められている県域は、この明治16年に定められたままになっております。何故このようなことになったのか調べてみると、明治5年当時の金沢県大惨事(現知事役)内山政風(薩摩藩出身士族)は、県都(県庁所在地)を「金沢」から「美川」に移してしまっただけでなく、移転の公式的な説明では、能登の大部分が「七尾県」として分離したため、県都が金沢では県域の北側に片寄りすぎており、通信・交通等行政上不便というものであったらしい。が、おそらく政治都市としての百万石城下町金沢の実勢力と旧加賀藩士族の県政に対する圧力を弱めようとの意図がかくされているのではないかと、といわれておったそうです。

県都移転の時、県庁所在地が石川郡であったことからその名をとって「金沢県」から「石川県」と改名してしまっただけでなく、約1年後の6年1月には県庁を再び金沢に戻してしまっただけでなく、県名が「金沢県」に戻ることは今日に至ってもありませんでした。一説に吸収合併されることになったことでは、新政府は朝

廷や日和見藩には山や川の名、もしくは郡名をあて、旧藩時代の名称や城下名を採用させなかったともいわれております。

県都移転の拳もあり、金沢のまちはそれ以降衰退の一途を辿り、幕末時の人口に戻るのに約40年後の明治の末期にようやく元の人口になったとも本に



<菅原神社>

書いてありました。それほど、このことが大きな影響を与えたことを物語っております。伝統と文化と歴史のまち「かなざわ」は、以後も連綿と続くかなざわらしいまちを維持し続けており、その一端が「空から謡が降るまち」ともいわれる所以でもあります。「空から謡が降るまち」とは、木や屋根の上で仕事をする庭師や大工も謡をうたったことからこのように言われたらしく、多くの人達が謡・小唄・三味線や鼓などの習い事などが盛んであったことを物語っています。

最後に先日東山界限をブラブラしていると、妙なものを見つけました。ひがし茶屋街の丑寅(良)方向の位置に鎮座まします茶屋街の鎮守社、菅原神社があり



ます。観光客でいつもぎわっているこの界限にしてはあまり足を運ぶひともし少ない小さな神社です。ふらっと境内に入ると手間に小さな狛犬、奥に大きな狛犬があい向かって鎮座しております。小さな方は社の屋根雪が丁度落ちてくる位置にあることからか、手が折れ、体中傷だらけの状態になって

おります。勿論、キチンと修復してありますが、見ていると何だか痛々しい感じがしてきます。そんなこともあって向かって左側の狛犬をしっかり観て見るとなんと男の子でした。小さいながらもしっかりした姿で納まっておりました。今まで狛犬は幾度となく見る機会がありましたが、このような姿のものを見るのは初めてであります。

皆さんも神社などにお立ち寄りの折りは、いろいろと観察してみてくださいはいかがでしょうか。新たな発見があるかもしれません。

皆様におかれましては、いつまでもお元気で過ごして下さい。ありがとうございました。

＊中四国九州地域『センツウ同窓会』を実施＊ 門司港元センツウビルに集う

ドコモ・センツウが今年の12月をもってドコモ・モバイルに吸収合併されることになったこと、門司港

でせんつうが入居していた「センツウビル」が2007



年の夏に、結婚式場兼フランス料理専門店「マリーゴールド門司港迎賓館」として生まれ変わっていたことから、今年のOB会は趣味を変え思い出の地「門司港」

で平成20年10月17日(金)中四国九州地域の「センツウ同窓会」として実施しました。



退職した近隣の多くの方に呼びかけたところ、遠くは関東から今井嘉昭さん、中国からは小熊利



明中国支店長、穴堀知男さん、四国から濱本康司さん、地元からは下哲男九州支店長、木本浩二、奥原修二、村上安男、横溝辰昌、西村方博、松崎繁行、藤野勝次、下村幸次、野村善男、藤井寛、渡辺正、小山

正、山口和子、高城万寿代(旧姓橋本)、白石蘭美(旧姓古池)、小嶋悦子(旧姓吉川)、山本和恵、志佐裕子(旧姓古賀)、金重寛の男性18名、女性6名合計24名の出席となりました。



会場となった「マリーゴールド」はセンツウが入居していた頃の面影はなく、外壁は塗り替えられ、夜間はライトアップされ、部屋の内部はチーク材の壁を用い、彫刻をはめ込みシックな雰囲気をかもし出していました。当日は18時から開会しましたが、お店の好意で広い店内は貸切にいただき、シャンパン、ワイン、ウイスキー、カクテル、日本酒、焼酎、その他ノンアルコールも完全フリードリンク制で行いました。時間が進むにとれてアルコールも回りあちらこちらに笑いや、話の輪が広がり、非常に盛り上がり時間も1時間延長していただきましたが、3時間はあつと



いう間に過ぎ、最後は皆様の健康を祈念し、再会を約束して万歳三唱で閉会となりました。

・[リポーター金重 寛さん]

○センツウ社員 池端圭一さん

ご家族へのお見舞い

6月14日午前8時43分頃発生いたしました岩手・宮城内陸地震により、山間部において池端圭一さんが行方不明となり3か月を過ぎましたが、いまだ行方が分かっておりません。ついては、池端さんのご家族へお見舞いしたいので協力願いたいとの要請がセンツウ東北支店有志から事務局にありました。

早速、長谷川から社友有志に働きかけを行いました結果、23名の皆様から協力を頂き、9月18日、佐藤健二さん経由にて総額10万1千円をご家族にお届けいたしました。以上、御礼方々ご報告申し上げます。

[長谷川事務局長]

○奥様からの御礼状

センツウ社友会の皆様へ

この度は、皆様からのお心尽くし深く感謝申し上げます。突然の事で、100日を過ぎた今でさえ信じられない日々でございます。

遠く宮城の地にて、皆様にこんな形でご心配をおかけするとは思ってもよらない事で申し訳ありません。

現場は、山が深く人が入るのが難しい状況です。この先何かのかたちで見つかる事を節に願っております。これから子供達3人と共に頑張っております。

皆様からの思い本当にありがとうございました。

[池端志津江]

* お悔やみ *

西井 昭 様 平成20年 4月 80才
 藤原一成 様 平成20年 7月17日 71才
 堀 昌夫 様 平成20年 8月18日 70才
 山下 學 様 平成20年10月17日 65才
 謹んでお悔やみ申し上げます。

次回の発行は1月を予定しています。

